



関田耕集  
一

15  
1544  
1





門 45  
號 1544  
卷 1



阿田耕筆

志海人乃かゝれるをぬのえりし  
是得しるしものくはくを及古れしはし  
小書付置しるはさぬのら控さるん茂情む  
し書はあてえせしやそしはのん人く乃  
あかふつれまはまにしはまを後しをも  
あいらぬの五雜俎のあつてまららひて天地  
人お事やうからてあれる古乃中より理  
見出るまに虫のほ又さしゆりしはし  
まはるまのけ類ふ花のたてあひい出れ  
こもあはつらくはあまもあしる人乃  
まらふふしあはんとさあみあのらあ



走來幾部著書成祇遺  
屏居遂嬾情最是紙田  
閒不得長遭筆耒四時  
耕

此予卜居岡田廬之初林泉院六如尊者見惠  
此作真知予平生者也及至此書遂取之以右  
焉故揭之卷首云 己未冬月 萬世識

岡田耕筆卷之一

岡田廬萬蹟著  
男伴資規直樹校

天地部

○長庚星と考へた夕豆都と中れつりぬ濁る和名抄  
中不豆とあるに二やたふ濁るふとありて中とふりうり  
此詞の如きの詩小雅人東海西有長庚のトれも傳に  
日既入謂明星為長庚廣續也とありふとあるをさうり  
はぐくのまうと下れしとこの濁るぶとありて平み考  
をめては貝系表の日本釋名をたねの夕の日につき  
てゆれいへ解せられうも何じとほ濁の事いひゆれ  
万葉第二のうらなとせつていへるまれと仮名まふり











○唐の國關しよく其に王者出るるひて人物  
制度はこれ本邦の後樂刑政もいふ徳のあり  
し多ふといふ徳れども必しも彼國のたつともあつて  
かつても天皇も通じてよたは是派のし

○この人自稱て中華も華もいふは物なりこれ  
この人これ徳のしつかりつて天はるれ廣莫なる  
いふは中華も華もあはれといふは中華のしつ  
きつてあつて中華のしつて中華のしつ  
かつた人を用人するは中華のしつて中華のしつ  
も同じく彼彼國のしつて中華のしつて中華のしつ  
○本邦のしつて中華のしつて中華のしつて中華のしつ  
善も悪も進も退もして有るは中華のしつて中華のしつ

真ふりて天皇と作くこと其に夫のごし民もつれ  
り雄界紀ふ樟嶋のしつて中華のしつて中華のしつ  
とありてひてふ殺するは國は信深君は義切忠踰白日節  
冠者去廢治り婦ありてまを殺すを節し忠する紀者  
の初めは信深の國のしつて中華のしつ

○中より威權藤氏もつし政勢令くまよにせやがて  
此權平氏もつり源二位もつて忠追補使の任とありて  
四條公常のしつて中華のしつて中華のしつ  
統連綿せよあやふく君たのふらした國凡に  
あつてやあつて吾所生の國は美といふは中華のしつ  
率もつて中華のしつて中華のしつて中華のしつ  
腐儒もありて國の衰はつてあつて中華のしつ



予も昔くもは彼にたを將女服とわゆる涼義海は縁りし  
○本邦の一人を殺すことばたれば言ふ女の人のまふ罪あるも  
死一とてなうして流刑の處せしる涼頼朝平氏といはるが  
内府とけり外斬<sup>サシ</sup>惡<sup>サイ</sup>兼<sup>ナ</sup>首<sup>ウ</sup>ふりしりこと女徳を搦りて  
刑とるこふのりけりそは院宣とてして追討とてし  
實れ却敵とてふもけりはれ却敵の宿仇のこをとり法皇  
の御處置<sup>ゴト</sup>よりせん元保元年治<sup>モトヒ</sup>を奉<sup>ホ</sup>りて壽永二年に  
本邦の凡ふふましける然し况北京氏徳を搦る帝  
乃遠村にめりて天と作と地を搦る臨<sup>ミ</sup>元弘建武  
府よりとてし

○彼國はいふ餘ありて武とては歴史もは穢穢  
事柄とあやまるところはたはちちも力量もそれとて

弱ふを今もと誇にふる人々日本人と相撲をてり  
考に員を一考してはんさうもちハニ<sup>ガニ</sup>性なり伐の奪人乃  
教誡<sup>キョウ</sup>給りたされどもぬべ固陣とてはよたる凡あるとい  
んそ二三といふ人々を罪する一考とてにせむとてまふされ  
とら一もまた罪をせしめ刑とるこやもよわりの三條り解  
友中とてふも乃<sup>リ</sup>延<sup>ニ</sup>歴<sup>シ</sup>史<sup>ト</sup>ふま一考の内<sup>ウチ</sup>者<sup>モノ</sup>寡<sup>カ</sup>とて極刑ありと  
復<sup>リ</sup>違<sup>フ</sup>とてしつとて肉をこぼして骨をふと信ふよりぬ  
一やりのものいハ我國よりとて人々を考るこも幸に  
吾邦とていりしははははははははははははははははははは  
一なるにたを考るこも一考とてははははははははははははは  
刑に人衆とていりしはははははははははははははははははは  
一非<sup>ヒ</sup>也<sup>ト</sup>の事<sup>ト</sup>本<sup>ト</sup>に<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>一考とてははははははははははははは















































































石見國邑知郡岩屋村

静窟圖



石見國











たつたはれおぼしきなりけりしにまうけりてあふ原天皇  
の陵もさうして是れをなすなりと云ふに奉る人の飯  
乃ち古昔村の山にありて國を昔より清浄ならしめり  
桓武天皇の御世に孫氏賜はるるに依りてさうなり  
まさしく清くありてなりしに王の代の國はさしも清く  
なりしにありてありしにまうけりて平安城國開の桓武天  
皇の陵にたはるるに依りてさうなりと云ふに奉る人の飯  
もさうして是れをなすなりと云ふに奉る人の飯  
てさうして是れをなすなりと云ふに奉る人の飯  
なりしにありてありしにまうけりてさうなりと云ふに  
たはるるに依りてさうなりと云ふに奉る人の飯  
大樹のたはるるに依りてさうなりと云ふに奉る人の飯

さうして是れをなすなりと云ふに奉る人の飯  
陵にたはるるに依りてさうなりと云ふに奉る人の飯  
今の上野村にありてありしにまうけりてさうなりと云ふに  
清くありてありしにまうけりてさうなりと云ふに奉る人の飯  
よりいふ料は天智帝の陵に清くありてありしにまうけりて  
清くありてありしにまうけりてさうなりと云ふに奉る人の飯  
そとにありてありしにまうけりてさうなりと云ふに奉る人の飯  
と云ふに奉る人の飯にありてありしにまうけりてさうなりと云ふに  
清くありてありしにまうけりてさうなりと云ふに奉る人の飯  
砌に醜陋なれりてありしにまうけりてさうなりと云ふに奉る人の飯  
此の山にありてありしにまうけりてさうなりと云ふに奉る人の飯

山科











備矣。雖然赤鳥早翔兮。春雨點其瑞。玄兔速過兮。秋  
露凝其瑞。清宮既廢矣。故今復上棟立柱以全其倖。  
獨因以祝冀明謨。融四裔定焉。良弼協和。八荒安  
焉。四時序季。疾病除焉。十雨順節。穀稟登焉。俯念神  
明。敬聖尚。無皇慙矣。敬白  
天慶八年乙巳八月二日

從四位下行木工頭紀朝臣貫之謹誌

神主正六位上出雲宿禰 貞主

工匠 無位 鞍部指足

大坂中に錦嶽といふ錦面といふ錦向が嶽といふ錦面  
と稱りて錦向といふ者なりともいふは此の所遷座  
の所錦を稱するが如くは此の所遷座といふは此の所遷座

樹の古櫻樹に止れるなまもいりあるの寺日談却日とも  
いふ大寺とも稱するは神といふ小寺といふに對してとも  
三座天徳日令天美鳥令二座の式内小社。入部徳大人令  
一座の式内小社。社記の式内付記。具は抄れるといふ  
とも今も思ふなり。なまもいりあるの寺日談却日とも

大寺は原の内の寺といひて後乃山に月といふは 作若石也  
後乃山は山といふは山といふは山といふは山といふは山  
まはれの所の寺といひては寺に乃の山といふは山といふは山  
なまもいりあるの寺といひては寺に乃の山といふは山といふは山  
今この社記と長とが岳といふは牧の長と檢といふは長といふは日  
あつたなり。却りのおの思ふは山といひては山といふは山といふは山































日向のちいり様のばらとあり二三人申の巻をさすは  
 一より形ありぬるもふくまきく久西家の門に兩側ふ建  
 てしと焼世中と猪事馬の巻を張ぬるい馬ふかと聞  
 じらぬ煉をさすいしあひはしきまもたわもきりりけたて  
 焼亡のしうとこの様の精細乃舞も申あてしうたの水  
 とあてしうとさすまらるるあてて

○南の七なる六里官の中の水ありのあな半の二月の末  
 小狐隊のいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい  
 中々やあなななななななななななななななななななな  
 くらぬあわぬあわぬあわぬあわぬあわぬあわぬあわぬあ  
 鷹とあてて城郭乃形ぬるもいふいふいふいふいふいふい  
 して甲冑と書ひしあなななななななななななななななな

又いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふい  
 一なるあなななななななななななななななななななな  
 ねどいば城郭はなななななななななななななななななな  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ

○あなななななななななななななななななななななな  
 して書に書に書に書に書に書に書に書に書に書に書に書に  
 一し橋南路のよなを記に記るねななななななななななな  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
 ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ



かりに （一） 唐人年寄町末にあり於て飲食  
 たり （二） 阿波の海にありては （三） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （四） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （五） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （六） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （七） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （八） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （九） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十） 阿波の海にありては

阿波の海にありては （十一） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十二） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十三） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十四） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十五） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十六） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十七） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十八） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （十九） 阿波の海にありては  
 阿波の海にありては （二十） 阿波の海にありては



怪しきことありきとて何某の船が強九なるものあり  
海に舟をせしが果して是れなるか鬼だちの舟と見え  
了るべしとていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
能く本領をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
たまたまいふもいふもいふも

○幽霊のはらひに思ひ出れり何某の極材の一僧の君を  
学力ある位僧の舟が必出ても一舟の舟尚乗らざるを  
とてり時しにありて急高量れんは杜え津土念何ふありて  
やべいりり小雲ありて腐上僧がごとくいふもいふもいふも  
一がはらひに思ひ出れり何某の極材の一僧の君を  
○懸絶絶登舟十丈屹正下へ急流迅激うて極  
建しつらるる奇巧と用し極をいふもいふもいふも

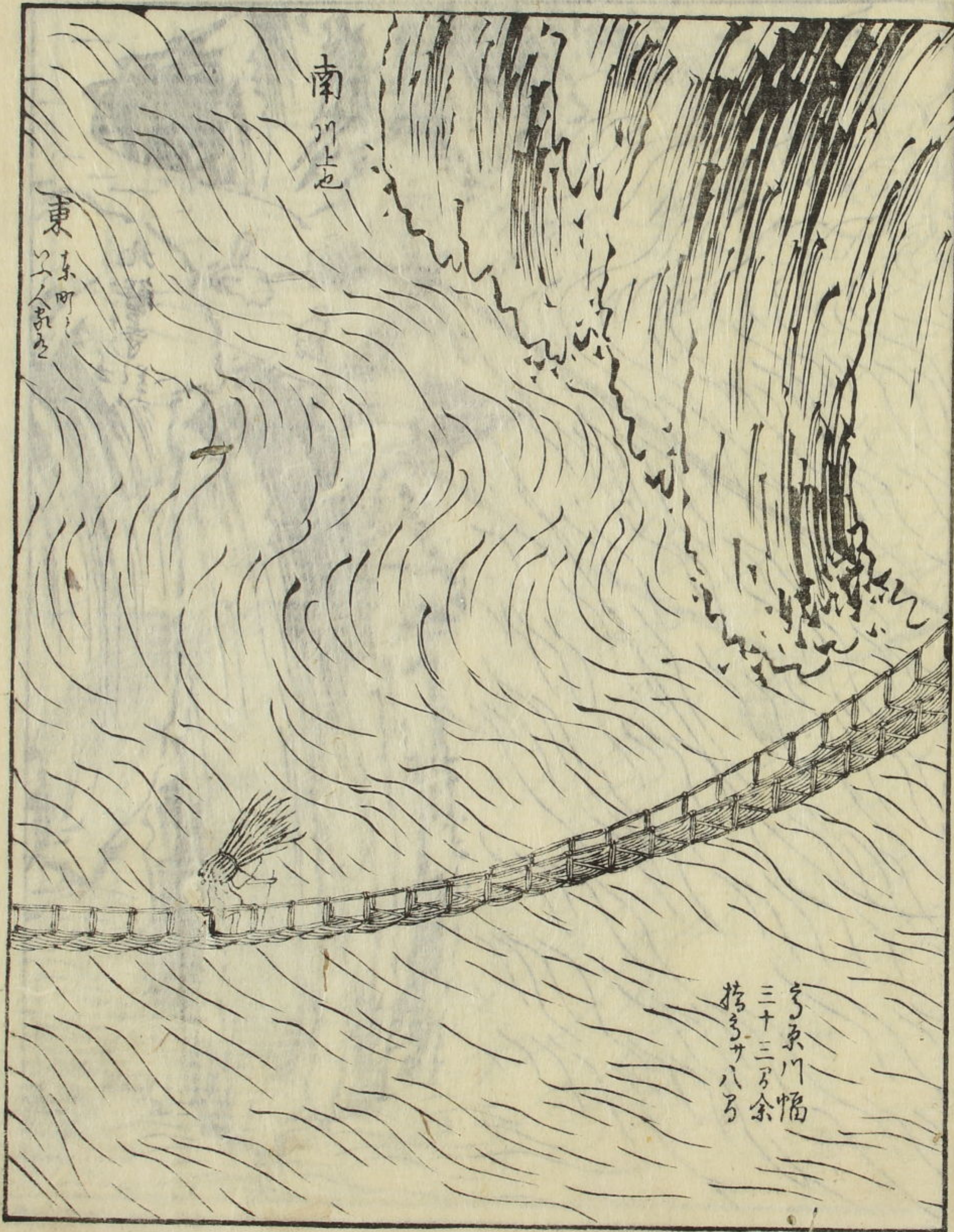
猿橋伝はる水内八曲橋をいふもいふもいふもいふもいふも  
此名考もいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
の様のたもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
中記よりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
せらふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
村よりのいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
下ふ道標の記はいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
建しつらるる奇巧と用し極をいふもいふもいふも  
精へいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
とていふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
南宮といふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも



さうも彼程浪とびておぼろぐりて一歩とわねまきくぬる雨来  
ふ船と船とど本腹と乗してゆくとん物もくくし牛もつりき  
船と解て水と激つしれも或は船と解とやうしてて  
牛もありしもの船もつりきつりて後記はねはるる之  
記いさ山の八田元義ちるる著きりまふりかると今要とより  
ても凡とて待よ春藤賦作梅も尺人似然蛇背とけつ  
もさうらうとて船くさるるつりて月夜舟行村を向部大物  
ふまきりつりつりて船かつりて名成取中山村よとて村を  
らぬ船とつりつりて船かつりて越中の南都より船後  
との橋ふちへ西渡ゆつりて度堂つりてつりて此兩所絶壁  
ふてつりて船もつりて氷に航とつりて船かつりてつりて  
つりて大索之船とつりて船かつりて船かつりてつりて

ふづつとつりて船もつりて大索ありてつりて船かつりてつりて  
つりて船かつりてつりて船かつりてつりて船かつりてつりて  
とたりてたやとつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
と一底の船とつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
毎の一面とつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
大那那つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
流駛さうもつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
積ふつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
まつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて  
つりてつりてつりてつりてつりてつりてつりてつりて





南川上迄

東

之京川幅  
三十三万余  
括多サ八万



西



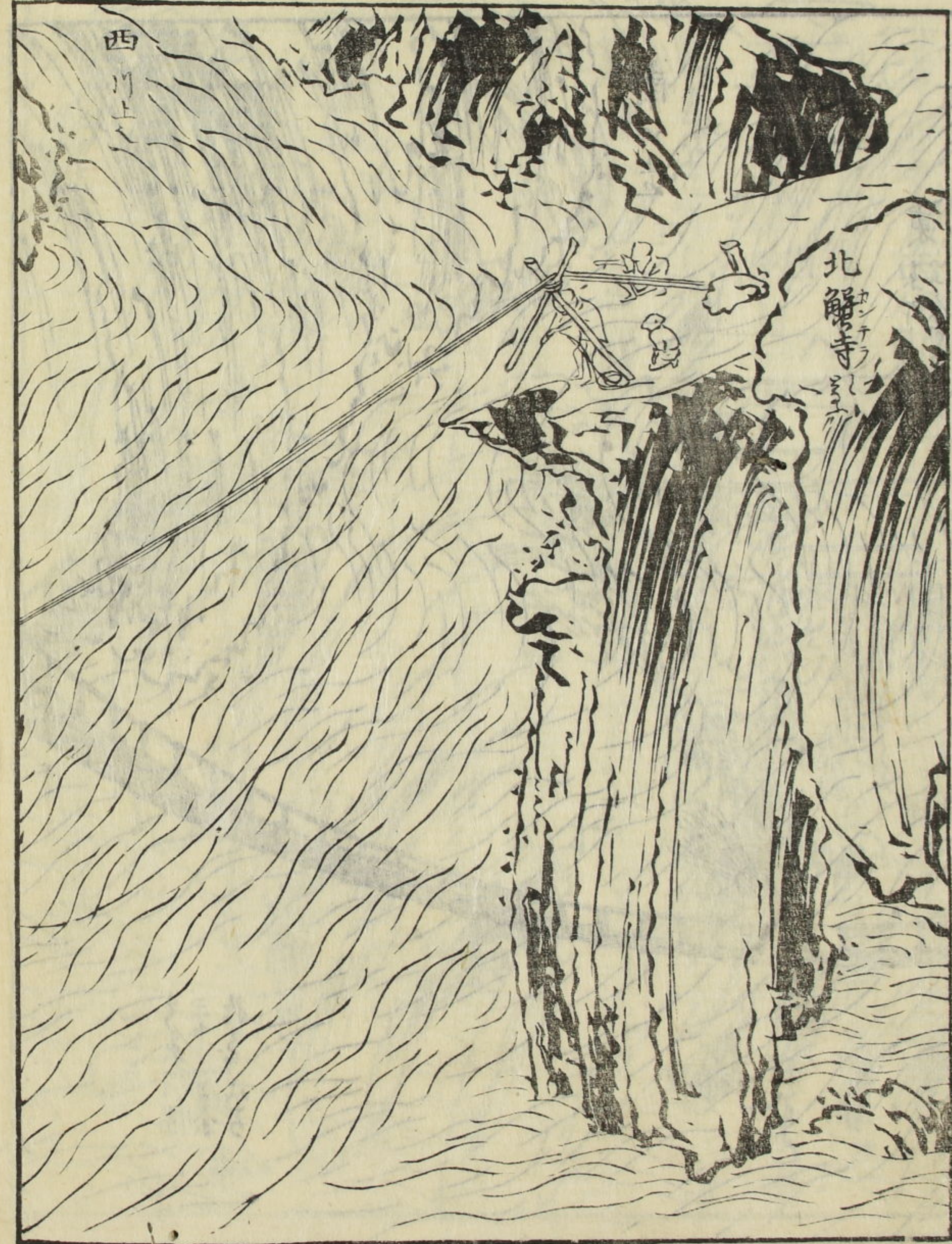


南  
中流

林  
十  
徳  
拾  
余

平田  
一

四十四



西

北  
解  
寺

四十四

平田  
一























あつたての備蓄の爲めがわきまなくとせしむれば  
あねずみの種と書に於て一かゝるのいふも  
らさるゝいふがごとし

77

岡田村年表第一



